畑地の裏作飼料作物

暖地の畑地の大半を占める、陸稲、甘藷、豆類等は秋とともに収穫され、その跡地の裏作には麦類、菜種等の作付けが行われますが、この単純な作付の反覆は土地を極度に劣変させ、春先における麦の黄化圃場が非常に増え、肥料多用の割に反収が増加せず、低麦価に加えて増々農家経営を苦しくしております。そこで今年は思い切って緑作を行い、有畜農家は家畜の腹を通して土地に豊富な有機質を、又無畜農家はそのまま緑肥として鋤き込み土地に生気をあたえ、表作からの一大増産を計画したいものであります。

寒冷地では夏作の麦類、亜麻等の跡地には必ずこれまた、飼料緑肥作物を播種し、土地の高度利用と、雑草の駆除、土壌の融雪時の流亡を防ぎ、土地の保全と生産増強に努めたいものであります。

さてそれではこれらの目的を達するためにはどんな飼料緑肥作物が適当であるかを述べたいと思います。

㈠ 暖地の畑地裏作（冬作）

(a) 晩夏から初秋に播種され、晩秋までに収穫されるもの（生育日数六〇日位でもよいもの）玉蜀黍（モロコシナンバ）ひまわり、かぶ、イタリアンライグラス

(b) 晩夏から初秋に播種され、冬に利用されるもの
ルタバガ、レープ、ケール

(c) 初秋に播種し、冬から早春に利用されるもの
燕麦、ライ麦、ベッチ、豌豆、かぶ、C・O、イタリアンライグラス、ルタバガ

(d) 秋播種―早春以降に収穫するもの
赤クロバー、アルサイククロバー、ラデノクロバー、イタリアンライグラス、ペレニアルライグラス、クリムソンクロバー

等が有利に利用出来る作物であります。この中でも特にお奨めしたいものは晩夏から初秋にかけての玉蜀黍は六〇日位で反収千貫の多収は容易であり、イタリアンライグラスも六〇日内外で五～六〇〇貫の良質の草が得られ、更に燕麦と、ベッチ、又は豌豆の混播が従来よりも相当早播きが行われ年内に一回利用するようになつて来ておりますが、この早播き、年内利用の燕麦は時に冬枯れを被ることもありますので、その際の安全弁としてイタリアンライグラスを反当一～二封度混播しますと、燕麦の冬枯れ時にもよく多収することが出来ます。又軽鬆土の燐酸欠乏土壌にはクリムソンクロバーを主体としたイタリアンライグラス等の混播も良い成績を得られるものです。暖地における有利な冬作の作付一例を図示しますと上図の通りであります。

㈡ 寒冷地の畑作裏作

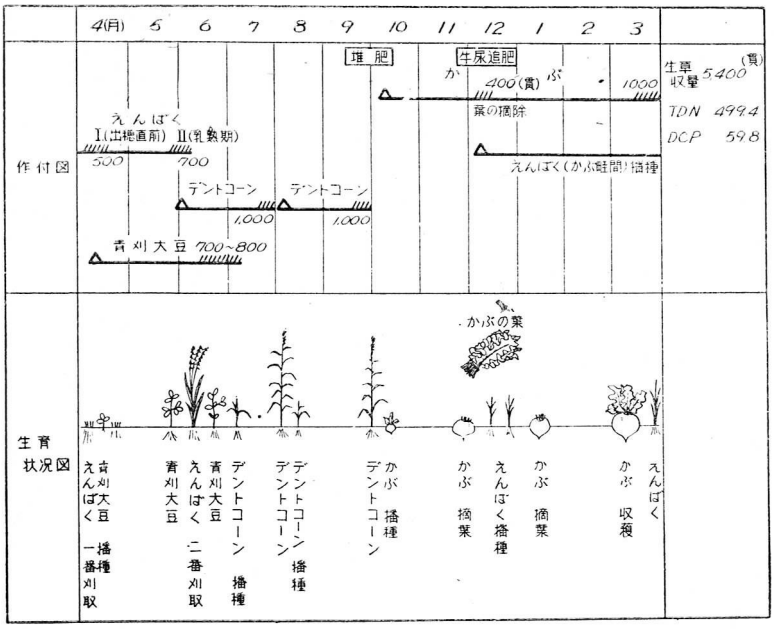
寒冷地の裏作の場合は年内利用のものと翌春利用のものに分けられますが、

(a) 年内利用のもの

なるべく夏作収穫後速かに播種することが必要で、これには、かぶ、イタリアンライグラスを挙げることが出来ます。

かぶはなるべく早期生育の紫丸かぶを利用しますと、六〇日位で千貫八～九〇日で二千貫以上の収穫が十分出来、イタリアンライグラスは播種後五～六〇日で四～五百貫の放牧草となり、冬の舎飼前に良質の若草を補給することが出来、更にこのイタリアンライグラスは無耕起播種も可能であり、生育の初期は相当の日陰にも耐えますから、前作の刈取り、一ケ月位前に播種しますと、栽培期間も相当に延長出来更に多収を期待することが出来ます。

(b) 翌春利用される作物

耐寒、耐雪性に富んだ作物が選ばれますが、ライ麦とヘヤリーベッチ、雪割ベッチ又は豌豆オーストリアンウインターピースとの混播及び、レープ（青刈菜種）が有利であります。この際播種は初霜の四～五〇日前が遅播きとしての有利な限界であります。又一般にライ麦と莢科の混播はライ麦の生育が勝つてベッチや豌豆の収量の少いきらいがありますが、このような場合はライ麦の播種量を単播の半量位にしたり、窒素肥量を減量し、又は麦と、莢科を一尺位の交互畦に播種しますと、全体の収量も挙がり、しかも莢科の豊富な飼料を生産することが出来ます。

中国地方に於ける多毛作例 （其の二）